



Title	1970年代再考 : 第6次『思想の科学』を手がかりとして
Author(s)	西谷, 元気
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 7, p. 63-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91185
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1970年代再考

—第6次『思想の科学』を手がかりとして—

現代日本学 博士前期課程1年

西谷 元気

はじめに

2000年代半ば以降、戦後日本の社会・文化をめぐっては、1968年、あるいはより広く1960年代後半を主題とする議論がさかんに展開されている¹。しかし、このような〈60年代〉をめぐり研究の多くは、〈60年代〉後半、とりわけ〈1968年〉の特殊性を強調する一方、十分な解像度をもった〈70年代〉への視座を構築できていない。近年では、〈70年代〉を主題とする研究成果も現れ始めてはいるが²、いまだ低調である。

以上のような研究動向を踏まえつつ、本発表では、70年代を中心に刊行されていた第6次『思想の科学』（1972年4月～81年3月）を手がかりとして、当該期に固有の社会・文化の特徴を捉えていくための視座を構築することを課題とする。『思想の科学』は、鶴見俊輔を中心として1946年に創刊され、日本社会に対する批判的視点に立ちつつも、党派からは一定の距離を保ち続けた重要なメディアである。とくに本発表で対象とする第6次は、自主刊行を続けつつ高度成長後の社会変容に対して強い問題意識を抱いていた時期であり、〈60年代〉における社会運動の高揚を中心とする歴史観に囚われないかたちで〈70年代〉固有の関心のあり方とその内容を捉えるうえで重要な手がかりになると考えられる。

第1節では、〈60年代〉後半から〈70年代〉にかけての日本の社会・文化を論じた先行研究に幅広く検討を加えることにより、上述した本発表の課題をより明確に設定する。第2節では、〈70年代〉への視座を構築するうえでの重要な手がかりとして第6次『思想の科学』に注目し、その特質を指摘する。そのうえで、第3節では、第6次『思想の科学』の重要な特徴のひとつである「サブカルチャー」論が照らし出すものを吟味することで、いまだ明確なかたちでは設定されていない〈70年代〉日本の社会・文化への視座を構築することを試みたい。

1. 〈60年代〉論から見た〈70年代〉と最近の〈70年代〉論

本節では、近年の〈60年代〉論や〈1968年〉論、さらには最近の〈70年代〉論において、〈70年代〉がどのようなかたちで主題化されているかを批判的に検証する。

¹ しばしば参照される初期の議論としては、桂秀美『1968』（ちくま新書、2006年）、小熊英二『1968』（新曜社、2009年）、四方田犬彦・平沢剛編著『1968年文化論』（毎日新聞社、2010年）などがある。その後、2017年には、国立歴史民俗博物館で企画展示「「1968年」—無数の問いの噴出の時代—」が開催され、2019年には同博物館の『研究報告』第216集「[共同研究]「1968年」社会運動の資料と展示に関する総合的研究」も発行されている。

² 成田龍一『『日本沈没』の沈没：1973年の日本の心性史』（宇野田尚哉他編著『対抗文化史：冷戦期日本の表現と運動』大阪大学出版会、2021年）、Igarashi Yoshikuni *Japan, 1972: Vision of Masculinity in an Age of Mass Consumerism* (Columbia University Press, 2021年)、日高勝之編『1970年代文化論』（青弓社、2022年）など。

先述した通り、2000年代半ば以降、学生運動や反戦運動を中心に世界中で社会運動が高揚した〈60年代〉後半、とりわけその運動がピークに達した〈1968年〉を主題とした研究や、当時の運動の当事者による記録などが、数多く蓄積されている。これらの研究や記録のなかには、〈60年代〉後半や〈1968年〉に「社会運動史上の分水嶺」を設定し、「新しい運動への転換点のひとつ」と捉え、〈60年代〉後半からの延長線上に〈70年代〉を位置づけるものが多い³。たとえば、〈60年代〉後半の「ニューレフト運動」における思想の画期性を強調したうえで70年代におけるその運動の展開を取り上げる研究や⁴、〈60年代〉後半の学生運動から社会運動の新しい趨勢を読み取る議論などが挙げられる⁵。これらの多くは、〈60年代〉後半あるいは〈1968年〉の特殊性を強調しすぎるあまり、その後に続く〈70年代〉に関しては十分な解像度をもって議論を展開できているとは言い難いものである。

また、最近、〈政治の季節〉として語られることの多い〈60年代〉や、大衆消費文化によって特徴づけられる〈80年代〉と比較して、その中間に位置する〈70年代〉に関する議論が少ないことを問題視し、メディア文化史の視点から〈70年代〉を論じた研究成果も出ている。日高勝之編『1970年代文化論』（注2参照）は、国家や地方、政治、家族、性、マイノリティといったさまざまな観点から70年代の文化を論じ、「多様な問題系」が結び付いた「癒合」の時代」として〈70年代〉を捉えている（268頁）。日高の〈70年代〉論は、当該期の特徴をなす多様性を単純化することなく捉えようとしている点で重要であるが、〈70年代〉の複雑さを強調するにとどまっているともいえる。

以上、見てきたように、〈70年代〉への視座はいまだ十分に構築されていない。

2. 〈70年代〉論への手がかりとしての第6次『思想の科学』

本節では、〈70年代〉への視座を構築するにあたり、第6次『思想の科学』が重要な手がかりとなる理由を論じる。

『思想の科学』は、1946年の創刊以来、日本社会に対する批判的視点に立ちつつも、戦後知識人のあいだで強い影響力を持った日本共産党からは一定の距離を置き続けた雑誌メディアである。50年代には講談社や中央公論社といった大手出版社から刊行されていたが、60年代には自主刊行に移行し、積極的に「市民」や「大衆」と呼ばれる人びとに対してアプローチするようになった。とりわけ自主刊行第2期にあたる第6次の誌面には、人びとの日常生活に強い関心を寄せる傾向がより顕著に現れる。

私たちは、管理され操作されている日常性に批判的に対峙しつつも、そのかたくなさの底に息づいている生の豊かさを見定め、日常生活に根ざした自主的な思想を創造するために、〈思想の科学〉の認識の方法をよりいっそう鍛えていきたい。

これは、第6次『思想の科学』の創刊号（1972年4月号）に編集委員会が寄せた「創刊

³ 小杉亮子「“1968”の学生運動を学びほぐす：東大闘争論の検討」（大野光明他編著『社会運動史研究2「1968」を編みなおす』新曜社、2020年）、71頁。

⁴ 安藤丈将『ニューレフト運動と市民社会：「60年代」の思想のゆくえ』世界思想社、2013年。

⁵ 富田武『歴史としての東大闘争：ぼくたちが闘ったわけ』ちくま新書、2019年。

にあたって」の一節である。第6次『思想の科学』の総目次を一瞥してみると、高度成長を経た後の日本における管理社会化の進行を批判的に捉える特集⁶や、主婦や子ども、老い、仕事、教育といった日常生活に即した論点を取り上げる特集⁷が目立つが、このような特集が積極的に組まれていったのは、前引の「創刊にあたって」にある通り、第6次『思想の科学』が「日常生活に根ざした自主的な思想を創造する」ことをみずからの課題としていたからであった。本発表が第6次『思想の科学』に注目するのは、このためである。

〈1968年〉を頂点とする政治的高揚の後の停滞と、1973年のオイル・ショックによる高度成長の終焉を承けた〈70年代〉には、企業社会化や地域開発といった人びとの生活にまで浸透してくるような社会変容があった。そのような時代としての〈70年代〉における、第6次『思想の科学』の問題意識のあり方は、当該期固有の社会・文化を捉えるうえで重要な手がかりとなる。

3. 第6次『思想の科学』の「サブカルチャー」論が照射するもの

本節では、第6次『思想の科学』の重要な特徴のひとつである「サブカルチャー」論に注目し、その論点を整理したうえで、それが〈70年代〉日本の社会・文化のどのようなあり方を照らし出しているのかについて考察する。

第6次『思想の科学』で主題化された「サブカルチャー」とは、社会学において「下位文化」や「副次的文化」と規定される一般的な意味での「サブカルチャー」ではない。

「思想として名をつけることのむずかしい、しかし実質的にわれわれの生き方を律している裏文化」⁸のことである。第6次『思想の科学』は、そのようなものに注目し、高度成長後の、管理化が進み、目に見えない抑圧が深まる社会状況を批判的に捉えようとした。

『思想の科学』は、〈70年代〉以前から、「生活者」と呼びうるような、「思考のベクトルをつねに生活「現場」にすえる人たち」に注目してきた⁹。そうした「生活者」を担い手として「地下水脈」のように全国に広がっていた営みが、第6次の頃から「サブカルチャー」として把握されるようになったのである¹⁰。

第6次『思想の科学』では、そのような意味での「サブカルチャー」の歴史や思想を論じた特集「日本のサブカルチャー」（1975年4月臨時増刊号）をはじめとして、地方語の持つ可能性を論じた特集（「ゆたかな生活語を求めて」1975年4月号）、「暮らし」を主題化した特集（「暮らしを変えよう」1975年7月号）、主婦としての生き方を肯定的に論じた特集（「いま、主婦とは何か」1977年5月号）など、「サブカルチャー」を主題

⁶ 「管理をくずすスタイル」（1973年5月号）、「管理社会＝現代の呪縛」（1978年10月臨時号）、「現代管理社会と名人」（1980年6月号）など。

⁷ 「もうひとつの教育」（1972年4月号）、「いま子どもはなにを」（1973年4月号）、「いま、主婦とは何か」（1977年5月号）、「仕事・労働・職業」（1979年7月号）など。

⁸ 鶴見俊輔「編集後記」（1975年4月臨時増刊号）

⁹ たとえば、全国各地のサークルによって刊行される小雑誌を時評する「日本の地下水」は、1960年1月から連載されていた。

¹⁰ 天野正子「地下水からサブカルチャーへ：もう一つの生活者考」鶴見俊輔編『源流から未来へ：『思想の科学』五十年』思想の科学社、2005年。

とする特集がさかんに組まれている。ここでは、そのなかでも、特に注目すべき2つの論説を取り上げて、第6次『思想の科学』における「サブカルチャー」が、70年代において持っていた抵抗の可能性を検討する。

日常論理学を提唱した哲学者の福田定良（1917～2002）は、「仕事のはなし」（1976年2月号）において、大組織に所属して出世を目指す、中央志向の「男の仕事」に、「いい加減」を自分で定めてさまざまな仕事をする主婦の労働を対置し、後者のほうが人間の仕事の本質に近いことを示唆する。この論説は、規律化された男性の労働によって成り立っている企業社会の価値観を相対化する視点を提供しようとしている。

阿伊染徳美（1935～）は、「標準語でしゃべると力が抜けるような気がする」感覚から、東北地方の言葉で「わがへらめき」（1973年12月号）を書く。阿伊染は、「自分の言葉」というものが持っている、「自分を動かし」、「他人をも動かす」力の可能性を指摘し、東北地方の発音を表現するための文字を発明する。この論説は、「日本列島改造」が唱えられるなか進みつつあった日本全国の画一化と、それにとまなう生活環境の激変に抗しつつ、伝統的な地方の文化や言葉が持つ抵抗の可能性を提示しようとしている。

第6次『思想の科学』で特徴的に浮上してくる「サブカルチャー」論を追っていくと、さまざまな人びとを担い手として自主刊行されていたこのメディアにおいて、〈70年代〉の社会や文化のどのようなあり方が問題視され、それに対する抵抗がどのように試みられていたのかが見えてくる。いま引いた例からもわかるように、彼らの関心の所在は、〈60年代〉後半に高唱された「革命」のような、大きな変革の物語には無かった。労働や教育の現場で進行する管理社会化や地域開発にとまなう全国的画一化への抗いといった、日常生活のなかでの、ささやかではあるが身近で確かな抵抗の実践が、彼らの関心の前景を占めていたのである。ここには、当時の人びとの生きられた実感に即しつつ〈70年代〉への視座を構築していくための重要な手がかりがあるといえる。

おわりに

これまで〈70年代〉は、全共闘運動やベ平連運動に注目する〈60年代〉論の射程を延長するかたちで論じられることが多かった。そのような議論は、〈1968年〉前後の特殊性を強調する一方で、十分な解像度をもった〈70年代〉への視座を構築することができていなかった。それに対して、発表者が試みているのは、さまざまな人びとの持続的な努力によって自主刊行が続けられていたという意味で重要な第6次『思想の科学』を手がかりとして、当時の人びとの生きられた実感に即しつつ〈70年代〉への視座を構築することである。〈60年代〉の〈政治の季節〉が去ったあと、日常生活を根拠地とする人びとのささやかな抵抗が前景化した。ここに連なっているのは、「革命」を志向した〈60年代〉後半の運動ではなく、『思想の科学』が地道に担ってきた「日本の地下水」とのつながりであるだろう。

もちろん、ウーマンリブや沖縄返還、アジアとの関係、大衆消費文化の萌芽など、〈70年代〉論を提起するにあたって考慮すべき論点は枚挙に暇がない。これらの論点と、本発表で提示した知見との関係を整理する作業は、今後の課題としたい。